

琵琶湖集水域では1960年代後半から加工組立型産業の立地が進むとともに、人口増加による都市化が見られました。その結果、琵琶湖の富栄養化や生物多様性の喪失をはじめとする環境悪化が1980年代から顕在化することになりました。しかし、市民、産業界そして行政の取り組みにより環境への負荷の小さい産業への転換への努力が続けられています。

## 1. 近江商人を生み出した滋賀

近江は古くから交通の要衝であり、琵琶湖を囲む北國街道、中仙道、東海道などの街道、南北を結ぶ水路としての琵琶湖は京、大阪と北陸、東日本との間の人の移動と物資の輸送を支えてきました。そのような地理的条件から、東の特産品を西に、西の特産品を東に運ぶ全国的な商業活動を展開する「近江商人」が生まれました。その商売倫理「三方よし」は現在まで受け継がれています。

## 2. 工業化と都市化の進展

琵琶湖畔で工業化と都市化が本格的に進展するのは1960年代後半以降のことになります。交通の要衝であることから、プラスチック製品、金属製品、機械器具、電気機械器具、輸送機械器具などの製造業の立地が進み、工業県へと転換を遂げていきます。同じく人口が急速に増加し、都市化も進展しました。

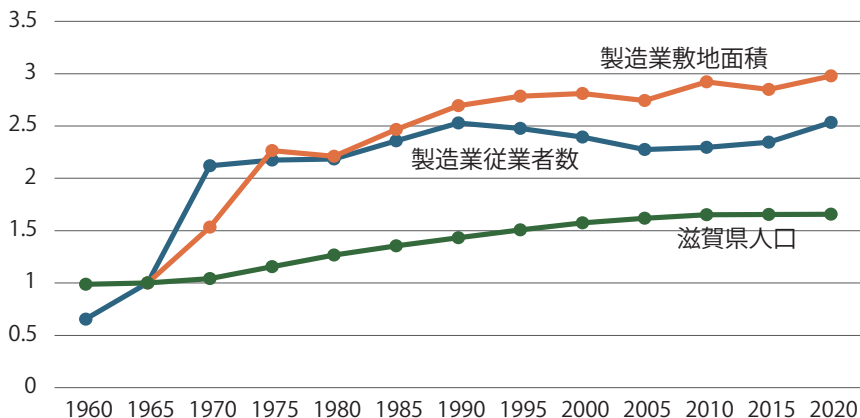


図4-7-1 1960年代後半から1970年代にかけた急速な工業化  
-1965年を基準とした製造業敷地面積、製造業従業者数、滋賀県人口の推移-

(製造業従業者数および製造業敷地面積(従業者30人以上)は「工業統計」、滋賀県人口は「国勢調査」より)



### 3. 琵琶湖の富栄養化とその対策

その結果、琵琶湖への汚濁負荷は1960年代後半から1980年代にかけて急激に大きくなり、淡水赤潮の発生など琵琶湖の富栄養化が進みました。しかし、1979年の「琵琶湖条例」を契機に環境改善の取り組みを市民、事業者、行政が連携して進めてきました。産業界では廃水の汚濁負荷を削減する取り組みが広がり、製造業からの汚濁負荷は大幅に削減されました。さらに、1990年代になると環境マネジメントシステムの導入に多くの事業所が取り組み、環境ビジネスを発展させようとする機運が官民を通じて高まってきました。

### 4. 産業の物質代謝

産業は社会が必要とするモノやサービス届けるため、原材料を調達し製造しています。その過程で不要となる残渣が廃棄として出てきます。これらを環境中に排出すると、水、土、大気の汚染を招きます。それらが生物や人体の健康に影響を及ぼさないよう処理されています。産業廃棄物の総排出量は滋賀県内で約380万t/年、その内製造業からは約90万t/年であり、これらは減量化や再生処理され最終的に廃棄物として処分される量は10万t/年程度になります。

### 5. サーキュラーエコノミーに向けて

しかし廃棄物を減らすだけではなく、資源の利用量そのものを減らすことが求められるようになってきました。鉱物資源の採掘、大規模な生物資源の栽培は地球環境に負荷を与えるだけでなく、持続可能な資源利用を困難にします。そこで、サーキュラーエコノミーの実現が課題になってきました。これは資源採取(原材料)、生産(製品)、消費(利用)、廃棄という一方向の流れで経済や暮らしを営むのではなく、すべての物質が社会と自然界を通じて循環する経済を築くことです。このために、地域の資源を地域で循環利用する仕組みを築くことも課題となっています。「三方よし」の産業が求められているのです。

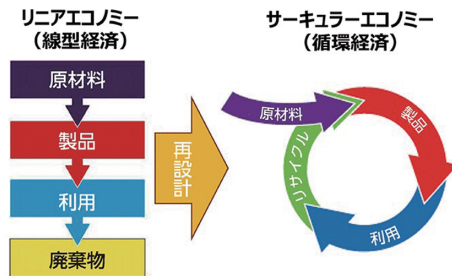


図4-7-1 サーキュラーエコノミー  
原材料、製品、利用、リサイクルのあらゆる局面で循環に向けた再設計が必要  
環境省『令和3年版環境白書』より

滋賀県立大学(名誉教授) 仁連 孝昭